確信への道程―永井隆の場合―

有坂文雄

今年は「長崎の鐘」の永井隆博士の生誕一〇〇年にあたります。戦中と戦後の短い期間を通して、放射線専門医師として、研究者として、そして多くの著書を通して戦後日本の社会に大きな影響を与えた博士は、常にキリスト者としての立場を明確に宣言していたと思います。

永井隆がキリスト者として真に確固とした信念を持っていたことは、原爆投下後の彼の行動、被爆者代表としての「原子爆弾合同葬弔辞」、床に伏すようになってからの数々の著書に如実に現れています。後に議論を呼んだ合同葬弔辞では、ひろば３２号のカスタニエダ神父様の巻頭言にあったように、長崎の原爆による（永井によれば特に「天主堂で祈りを捧げつつ亡くなった」）人々の死を、私たち人類の犯した罪の償いとしての燔祭と捉え、苦難と悲惨に満ちた道を歩んでいくことが罪への償いを果たす希望への道である、と述べました。しかし、この考え方はキリスト者以外の人には分かりにくいものであり、原爆を正当化するものだとして批判する人があったのも事実でした。いずれにしても信仰に対する確固たる信念なしにはこのような発言はできなかったのではないでしょうか。

永井は高校では自然観察と議論を好み、唯物論の虜となっていた、と言われています。その永井がどのような経緯を経て確固としたキリスト者となったか、その足跡をたどってみたいと思いました。今回参考にしたのは子息の永井誠一（まこと）氏が書かれた「永井隆―長崎の原爆に直撃された放射線専門医師」（サンパウロ、二〇〇〇年）と永井隆の若干の著書です。

唯物論からの決別の最初のきっかけは母ツネの脳溢血による急死だったようです。自然科学、実証主義が唯一の真理を認識する手段であると思っていた永井でしたが、母の最期に立ち会った時、自分を見つめた母の目が『お母さんは死んでも、霊魂は隆ちゃんのそばに、いつまでもついているよ』と確かに言った、と記しています（「ロザリオの鎖」より）。その時、永井は大学の三年生でした。その後間もなく出会った一冊の本、パスカルの『パンセ』がさらに大きな影響を与えました。数学者、物理学者として輝かしい業績を残したパスカルが彼の科学と何の矛盾もなく信じていた霊魂、永遠、神・・・そして、その信仰の源であるカトリックの教えとはどんなものだろうか、ということからカトリックの教えを学びたいという望みを抱くようになりました。

そんな永井が出会った不思議な巡り合わせは、下宿を探して浦上地区を歩き回っているうちにやっと見つけた家が「古めいた二階建ての木造家

屋」で、一旦は断られるのですが、二日後に再交渉してようやく承諾を得ることができました。その森山家は浦上キリシタンの家系で、代々が地域のカトリック信者の「張方（ちょうがた）」であり、家屋は仮の教会に代用できる造りになっていたと云うことです。そして、荷物を運び込んだ日が、ちょうど復活祭の祝日だったのも不思議な巡り合わせというほかありません。こうして、森山家に下宿するようになった永井はそこで身近にカトリックに接し、クリスマスのミサに誘われ、要理の勉強を始めることになったということです。その後の永井隆の歩みは「ひろば」３２号に記しました。病気、放射線科への入局、出征、レントゲン撮影による被爆、原爆と妻の死、療養生活、これら一つ一つの出来事が永井隆の生涯の生き方を形成していったと思われます。

もうひとつ注目されるのは、短歌への傾倒です。永井隆の短歌や詩を集めた「新しき朝」の序文（永井誠一氏）によれば、永井は尋常小学校高学年より詩句に興味を持ち、旧制松江高校時代には短歌会に入り、長崎医大在学中にアララギ会支部に入会しています。長崎の同会支部は、長崎医大の前身である長崎医専時代に教授として赴任した斎藤茂吉が創立したものです。永井がなぜ長崎医大に入学したかについていろいろ言われていますが、それが主要な原因ではないにしても、「アララギ会支部」が長崎医大への入学に心理的にポジティブに働いた可能性はあるのではないでしょうか。芸術は、それが直接信仰に導くとは思えませんが、芸術を解する繊細な心が信仰の道への助けとなった可能性は大いにあると思います。

ところで、キリスト者としての永井が自然科学をどのように理解していたかは『この子を残して』の中の「科学者と宗教」の項に見ることができます。その中にある原子論・分子論や進化論に関する否定的な理解と見解は、残念ながら現在の（専門家の）常識とは相容れないものです。しかし、これは永井が物理学者ではなかったことと、当時の自然科学の状況によるのだと思います。現在では原子・分子は特殊な方法を使うと見ることができます。永井は、自然科学の考え方は時代によって変わってくると言いますが、自然科学、特に物理学の歴史を顧みると、もちろん個々の理論や実験が誤りだったという例はないわけではありませんが、全体としてみると、新しい理論が古い理論を包括する形で発展しています。決してあっちに揺れ、こっちに揺れたりしているわけではありません。また、進化論に関しては、当時はまだイエズス会の考古学者として進化論を擁護したテイヤール・ド・シャルダンは日本では知られていませんでしたし、遺伝子の化学的実態が明らかになったのは一九五三年のことでした。進化論はその後大きな発

展を遂げ(日本の研究者の大きな貢献があります)、現在では進化論は(専門家には)仮説ではなくて実験的に証明されたものと考えられています。なお、永井は自然科学の研究自体は神の創られた自然を理解するための方法として高く評価しています。

このような永井の自然科学に関する、誤りを含む見解は、決して彼の戦時中から戦後にかけての日本の社会や教会への貢献の評価を下げるものではないと思います。永井を信仰に導くきっかけとなったパスカルの、次の言葉を引用して小文を閉じたいと思います。

「世の中にはよしと認められる二種類の人間がいる。即ち、神を知っているので全霊を尽くして神に仕える人と、神を知らないが故に全霊を尽くして神を探し求める人たちである。」

Blaise Pascal